父はどこですか

ルカ１５：１０～３２

2017/2/12

引用個所の放蕩息子の物語は、イエス様のたとえ話の中でも特に良く知られ、親しまれて来たものです。財産を持って家を飛び出て行った息子を案じ、毎日庭先に立って、その帰りを今かいまかと待ち続けた父親の姿。放蕩に身を持ち崩し、落ちぶれ果てて父親を思い出し、ついに父のもとに帰って赦しを乞う息子の姿。非常に感動的です。これは、罪人が悔い改めて帰ってくることを期待して、常に待ち続けておられる神と、素直に悔い改める罪人を表しているものとして、しばしば説教のテキストとしても用いられ、クリスチャンたちの心を打ち、慰めともなり、励ましともなっています。

ところが牧師は、伝道説教のテキストとしてこの物語が用いられるたびに、強い違和感を抱き続けても来ました。私たち異邦人、特に日本人には、あずかり知らない物語に聞こえてならず、伝道説教としては勧められないと思われたからです。私たち日本人に、この物語をそのまま用いて神の愛を語るのは、ふさわしい方法ではありません。この物語は、イエス様が 2000 年も前のイスラエル人に向けて、特別にお造りになったものです。彼らの宗教心と神意識、あるいは文化習慣と言うものが、とても効果的に取り入れられています。

それだけに、宗教意識も神意識も何もかも異なっている今の日本人に、これが生のままで語られても、本来の効果を持つものではありません。幸い牧師は、クリスチャンになって相当たってから、つまりキリスト教の神学をかなり理解してから、この物語を読みましたので、る程度この物語を理解し、感動することもできました。しかし、一般の日本人には非常に分かりにくい物語だと思われます。これを語るときには、特別な配慮が必要です。

Ⅰ．　父を捨てて家を出た記憶がない　　イエス様のたとえでは、「次男坊は父を捨てて家を出た身勝手な人間でした。確かにそれはイスラエル人全体に対するたとえとしては通用することでしょう。天地創造の神を明らかに知らされていたのに、その神を捨て、偶像礼拝にうつつを抜かしていたのです。このようなたとえに、イスラエル人は個人としても民族としても、充分に思い当たる節があったはずです。しかし、日本人にはそのような記憶がないのです。

日本人はむしろ優しい自然に包まれて、その自然の内におられる大きな存在をかすかに感じながら、感謝と畏敬の思いをもってこのお方を仰いできたのです。確かにこのお方のことを少しばかり軽んじて、生きてきたと言われればその通りですが、このお方をまったく捨てて、偶像礼拝に走り、身勝手な生き方をしてということがありません。

Ⅱ．　放蕩に身を持ち崩した記憶が無い　　全体的に見ると、日本人は和を重んじ勤勉を旨として生きてきました。造り主であるお方を微（かすか）に感じながら、よくは分からないままにもこのお方を崇め、このお方のそばを離れたことがありません。このお方を偶像で表現しようなどとも考えませんでし

た。

　それればかりか、このお方の恵みと祝福をあらゆるところに感じて、祭りを行いながら豊かな生活を営んできました。確かに天変地異もあり、戦もあり、不幸もたくさんありましたが、日本全体の歴史を見ると、豊かで平穏な暮らしを楽しみ、感謝の心で生きてきたのです。

Ⅲ.　本心に戻って父のもとに帰るという意識は無い　日本人は自分の恥や間違い、罪深さを感じたときには、人間との交わりを絶って隠遁生活に入るとか、仏門に入るなど、恵みを返上するあるいは断捨するという気持ちは持ちますが、父に帰るという気持ちにはなりません。自分の失敗で、泣きを入れて父親のもとに帰るなどと言うのは、幼児ならまだしも、成人男子にはあり得ないことです。故郷には錦を飾って帰るもので、尾羽をうち枯らして帰るものではりません。死ぬまで頑張って、それでもだめなら、潔く骨を野山に晒して自然に帰るだけです。

Ⅳ.　日本には家を捨てて出て行った息子を案じて待つ父親は

無い　たとえ日本人でも、家を出た息子を案じる親心はあるでしょう。しかし日本人の父は、そのように家を出た息子を案じて待ち続けることはしません。それをするのは母親です。だから、「日本人に必

要なのは、父なる神ではなく、母なる神だ」と言われるのです。日本人の男にとって、最後に思い出して帰ろうとするのは、たぶん、故郷でしょう。父でもなく、母でもなく、周囲の人々でもなく、自分の故郷と呼ばれる慣れ親しんだ自然でしょう。日本人は言うのです。父とは誰のことですか。どこにおられるのですか。

Ⅴ.　自然とのかかわりを通して福音を語る　日本人は自然を愛します。自分も自然の一部と捉え、男女を問わず、死後には散骨を願う人が増えているのも、自然に帰るという心の現れでしょう。自然の幽玄さの中に幽玄さ以上の存在を感じ、その中に安らぎたいというのが多くの日本人の心です。

　この幽玄な自然の中で、日本人はその自然をお造りになった存在を微かに感じ、その方に命を与えられ守られ生かされてきたと感じているのです。だから日本人に放蕩息子の話をしても、物語としては面白いとしても、「何となく違う」と違和感を抱くのです。大切なのは幽玄な大自然を造りその中に人を置き、その自然を通してご自分を現し、人に語り掛けておられるお方を、そっと教えてさしあげることです。

　日本人は、天地をお造りになったお方の存在を明らかに認めると、聖書の神を神と認めることができるようになるのです。

Ⅵ.　私たちがこのお方の恵みに満たされて生きる　品行方正学術優秀なクリスチャンも悪くはりません。でも大自然の恵みに感謝し、晴れ晴れとまた生き生きと暮らしましょう。また、その大自然を与え、大自然を通して語り続けておられるお方に耳を傾けながら、そのお方と語り、賛美しながら生きる者になりましょう。そのように生きることができるようにと、イエス様が十字架にかかってくださったのです。神は十字架を通して、人間が神の祝福を素直に受け取ることができるようにしてくださったので

す。

　イエス様は聞いている人たちの文化や習慣や環境を大変よくご存じで、彼らが一番理解し易く、受け入れられ易い方法で真理をお語りになりました。そのイエス様のたとえ話を、そのまま日本人に語り聞かせるだけでは、福音ではなくなってしまいます。福音の真髄を理解して、イエス様の教えもその神髄に沿ってしっかりと把握したうえで、日本人に理解しやすく受け入れやすく語ってこそ、日本人への福音となるのです。放蕩息子のたとえ話には、実は、日本人に受け入れられる神の姿が、実に上手く表現されています。毎日息子を待ち続け、走り寄って息子を抱きかかえる神は、まさに、日本人が願い望む「母なる神」の姿です。日本人に理解されるために、神の母性的な面を強く打ち出す、日本人向けのたとえ話も創ってみましょう。イエス様の福音に生かされ、イエス様の福音に生きる日本人となりましょう。